宇土城跡（西岡台）Ⅳ

―発掘調査と保存整備事業概報―

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第22集

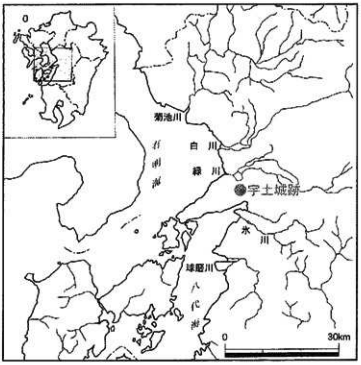
２００１年３月

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西岡台）Ⅳ

—発掘調査と保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第22集



２００１年３月

熊本県宇土市教育委員会

序　　文

本書は、宇土城跡（西岡台）の主郭である千畳敷の発掘調査と保存整備工事の概要報告書です。

平成２年度より保存整備を目的とした発掘調査を開始して以来、本年で11年になります。これまでの調査で、空堀跡、掘立柱建物跡、柵列跡、門跡、登城道跡などの遺構や、在地産の土師器皿・瓦質土器や中国産・タイ産の土器・陶磁器、鉄砲玉などが出土しており、たいへん重要な成果が得られています。

保存整備に関しては、発掘調査の成果や正しい歴史背景にもとづいた整備を行うために、平成９年度より史跡宇土城跡保存整備検討委員会を発足して、年３回程度整備方法を検討する会議を開催しています。本委員会の指導・助言をうけて、平成９～11年度にかけて千畳敷の掘立柱建物跡の平面表示や空堀跡の復元整備などの保存整備工事を行いました。

本書が、文化財の保護や理解の一助になれば幸いに思います。最後になりましたが、調査ならびに整備にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁ならびに熊本県教育委員会、保存整備検討委員の先生方をはじめとする関係各位の皆様に心から感謝申し上げます。

平成13年３月

宇土市教育委員会
宇土市教育長　坂　本　光　隆

例　言

1．本書は、国・県補助金を得て宇土市教育委員会が実施した、史跡宇土城跡保存修理事業にともなう主郭（郭名：千畳敷）登城道周辺の発掘調査ならびに平成９・10年度保存整備工事の概要報告書である。
2．調査地は、熊本県宇土市神馬町字千畳敷に所在する。
3．発掘調査担当者は以下のとおり。

第５次調査（平成３年度）	教育委員会文化振興課	主事　元松茂樹（当時）
第７次調査（平成５年度）	〃	参事　木下洋介（当時）
第12次調査（平成12年度）	〃	技師　藤本貴仁

4．遺構実測図作成・同写真撮影は各調査担当者が行ない、調査区の空中写真撮影・図化は業者に委託した。
5．遺構実測図の製図は山口陽子、平木君代、藤本が行ない、遺物写真撮影は藤本が行った。
6．本書で用いたレベルは海抜絶対高であり、方位は座標北である。
7．本書の執筆・編集は藤本が行った。
8．出土遺物・その他関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第１節　調査にいたる経緯と経過……1
　第２節　調査の組織……1
第Ⅱ章　位置と環境……3
　第１節　遺跡の位置と地理的環境……3
　第２節　歴史的概要……3
第Ⅲ章　調査の成果……7
　第１節　調査の概要……7
　第２節　遺構……9
　第３節　遺物……15
第Ⅳ章　まとめ……17
第Ⅴ章　保存整備……19
　第１節　平成９年度保存修理工事……19
　第２節　平成10年度保存修理工事……22

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（s＝1/50,000）……4
第２図　宇土城跡縄張り図（s＝1/5,000）……4
第３図　千畳敷主要遺構図（s＝1/600）……5
第４図　調査区配置図（s＝1/200）……8
第５図　SF01土層断面図（s＝1/50・1/60）…10
第６図　SB10実測図（s＝1/40）……12
第７図　SD02土層断面図（s＝1/50）……13
第８図　SX01周辺実測図（s＝1/100）……14
第９図　堀保存整備計画平面図（s＝1/1,000）…19
第10図　堀標準断面図（s＝1/100）……20
第11図　暗渠排水工断面図（s＝1/10）……20
第12図　千畳敷保存整備平面図（s＝1/1,000）‥22
第13図　堀保存整備平面図（s＝1/200）……23
第14図　堀標準断面図（s＝1/100）……23
第15図　法面保護工断面図（s＝1/200）……24

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査にいたる経緯と経過

昭和49年（1974）、当時市指定史跡であった宇土城跡（西岡台）が位置する台地に、市立鵜城中学校の移転が決定したため、ただちに記録保存を前提とした発掘調査が行なわれた。その結果、古墳時代前期首長居館に伴なうＶ字溝、宇土城跡主郭である千畳敷をめぐる内堀や外堀、掘立柱建物跡が確認され、遺跡の重要性が明らかとなった。調査後、遺跡を守り後世に残そうと関係諸機関の努力があり、中学校移転は中止されて宇土城跡は歴史公園として保存・活用されることになった。

昭和54年（1979）３月12日には国指定史跡となり、昭和56年度に宇土城跡の保存整備の基本方針をまとめた『史跡宇土城跡環境整備計画』が策定され、本計画書にもとづく保存整備事業が開始された。本計画書では、宇土城跡を第１～５ブロックに地区割しており、最も東側の第１ブロックは整備を完了している。また、宇土城跡が位置する台地の地山はもろい性質の角礫凝灰岩であることから、城郭遺構の整備に直接関係しない防災工事に比較的長い期間が費やされた。

史跡整備を目的とした発掘調査が開始されたのは、平成２年（1989）からである。ほぼ毎年のように調査が行われており、これまで千畳敷や千畳敷の内・外堀などの調査が行われた。その結果、千畳敷において多数の掘立柱建物跡が検出されたほか、登城道跡、門跡などが確認された。また、平成10年度の調査では、千畳敷内堀が未完成だったと推定される地山掘削土の堆積を確認するなどの成果があった。

平成９年度には、学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足し、宇土城跡の調査成果や歴史背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備が進められている。平成10年度には、本委員会の指導・助言のもとに『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』が刊行され、平成15年度をめどに発掘調査と並行して千畳敷およびその周辺の整備を進めている。

本書は、これまでの調査のうち、千畳敷東端に位置する登城道とその周辺の発掘調査概要をまとめたものである。

第２節　調査の組織（敬称略）

調 査 主 体　宇土市教育委員会

調査担当者　例言を参照

史跡宇土城跡保存整備検討委員会（平成12年度）

北野隆（委員長、熊本大学教授）、服部英雄（九州大学教授）、高野茂（熊本県立宇土高等学校教諭）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館助手）

指導・助言（平成12年度）

本中眞・加藤允彦（文化庁記念物課）、大田幸博（熊本県文化課）、村田房夫・鵜田倉造・舟田義輔・吉田恒（宇土市文化財保護審議会）

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

熊本県宇土市は、熊本県の中央海岸部より西側に突出した宇土半島北側に位置し、東西24.8km、南北約7.6kmと東西に長く、面積は約74.12km²である。北に熊本市・下益城郡富合町、南に同松橋町・宇土郡不知火町・同三角町、東に下益城郡城南町とそれぞれ接している。

宇土半島は、北は有明海、南は不知火海（八代海）に面しており、平野は比較的少なく山がちの地形で主峰は大岳（478m）である。市域境の宇土半島基部北側には、県内における主要河川のひとつである緑川が貫流しており、その流れによってつくりだされた沖積地に宇土市街地が形成されている。北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝地である。

宇土城跡は、中心市街地から南西へ約２km、沖積地の西側縁辺部に立地しており、標高39m、東西約750m、南北約400mの独立丘陵上に位置する中世城郭である（第１・２図）。丘陵北側は急傾斜地であるが、南側は緩傾斜地で現在は住宅地や畑地として土地利用されている。基盤層は大岳・三角岳の火砕流堆積物である角礫凝灰岩であり、もろく崩壊しやすい。

城の規模は、全面発掘調査が行われていないので不明な点もあるが、表面観察やこれまでの発掘調査から独立丘陵の多くを占めると推定される。本丘陵頂部には東側と西側に２つの高位部が存在するが、これらが宇土城の曲輪である。

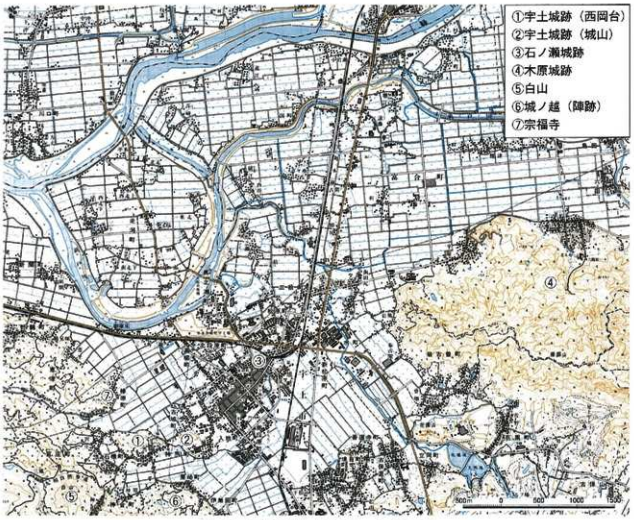
東側が「千畳敷（せんじょうじき）」と呼称される主郭であり、標高37m、東西約50m、南北約65mの削平地である（第３図）。その周囲は２重の空堀（外堀は東側と南側のみ）や切岸で守りを固めている。また、西側が「三城（さんのじょう）」と呼称される第２郭であり、標高39m、東西約80m、南北約35mの削平地である。空堀や土塁などは確認されていないが、１次調査で掘立柱建物や門跡、柵跡などが検出されている。本曲輪西側には、地元で「からほり」と呼ばれる長さ約300m、最大幅約15m、最深部約15mの大規模な堀切が宇土城西側城域を画する。

丘陵南側は、比較的広い平坦地が棚田のように連続する地形から、領主居館や家臣団の屋敷がこの地に存在したとみられる。

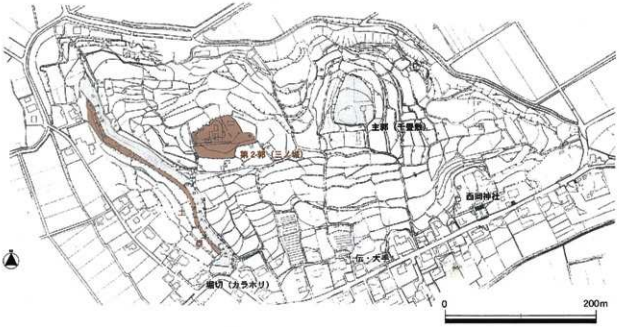
第２節　歴史的概要

宇土城跡周辺部には、縄文時代から近世までかなりの数の遺跡が点在しているが、本書では紙面の都合によりこれら全てを取り上げず、宇土城に関連する中世から近世初頭の歴史的概要に限り論述する（第１図）。

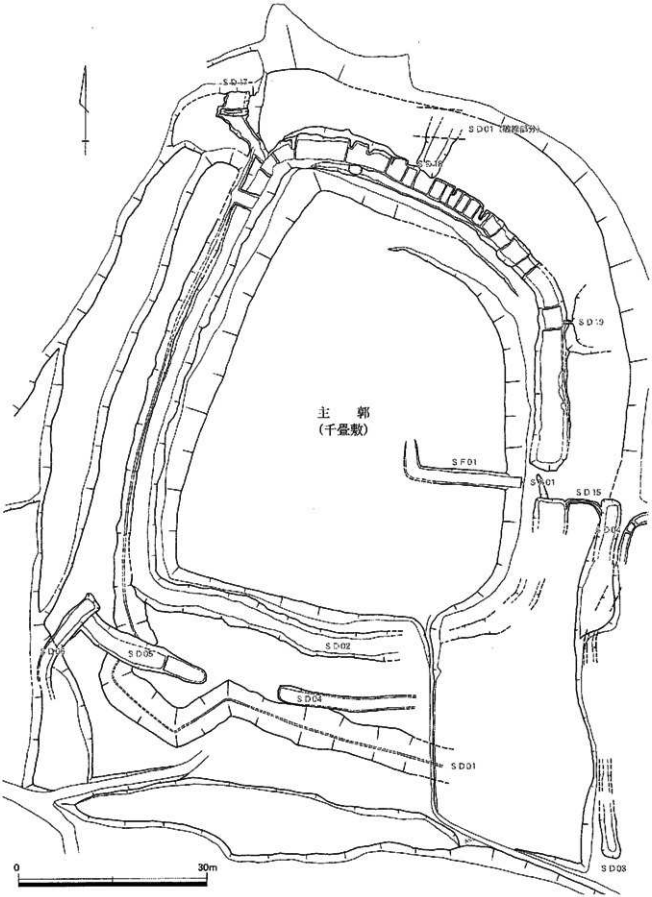
鎌倉末期から室町中期までの在地領主は、菊池氏系統と考えられている宇土氏であり、その本拠が宇土城と推定される。宇土氏の文献上での初見は宇土高俊である。正平３年（1348）に征西将軍懐良親王を宇土津（推定地：宇土市椿原）に迎え入れており（『阿蘇文書』）、南朝方として活動した。元中７年（1390）、宇土氏の居城は九州探題今川了俊率いる軍勢の攻撃を受けて落城しているが、この城がおそらく宇土城であろう。その後、宇土氏は肥後国守護菊池持朝の子、為



第１図　周辺遺跡分布図（Ｓ＝１／50,000）



第２図　宇土城跡縄張り図（Ｓ＝１／5,000）



第３図　千畳敷主要遺構図（Ｓ＝１／600）

光を養子とした。ところが、文亀３年（1503）に為光が守護職をねらって守護菊池能運と争い失敗、滅亡した。

この頃、肥後南部では八代地方の名和氏と球磨地方の相良氏が八代支配をめぐり混乱状態にあった。文亀４年（1504）、名和氏は八代地方を追われるが、宇土氏滅亡の混乱に乗じて名和顕忠が宇土城に入城した。名和氏は、石ノ瀬城[9]・田平城（宇土市）、矢崎城（三角町）、阿高城（城南町）などに支城を構え、不知火海（八代海）を一望できる白山は堀切が残存することから、砦的な役目があったとみられる。名和氏が宇土を拠点としてからも、八代・球磨の両郡を治めた相良氏とは争いが絶えず、豊福城（松橋町）をめぐり何度も攻防を繰り返した。その後、天正15年（1587）に豊臣秀吉の九州平定で８代顕孝は開城し、80年余り続いた名和氏統治が終わった。なお、名和氏の菩提寺は宇土市椿原町に所在する宗福寺である。

天正16年（1588）、肥後南半の宇土・益城・八代３郡を与えられた小西行長は、宇土城に入ったが、翌17年に宇土城より東約500mに新城（宇土城跡城山）の築城を開始した。新城建設に伴ない宇土城は廃城になったとみられる。行長は新城築城とともに宇土のまちづくりにも着手したが、西軍として参加した関ヶ原の戦いに敗れ処刑された。西軍の敗北を知った加藤清正は、城ノ越（宇土市栗崎町）など数ヶ所に陣を張り、城山を攻め落とした。その後、清正は自らの隠居所とするために城山を改修したが、移り住むことなく慶長16年（1611）に亡くなった。

城山は、慶長17年（1612）と天草・島原の乱後の寛永14年（1637）に幕命により２度にわたり破却された。現在では、ごく一部に清正改修後の石垣が露出しており、堀の痕跡が確認できる。

註

1）文献史料において、石ノ瀬城が名和氏の支城であるとの記述は確認されないが、16世紀中頃を中心とした陶磁器が出土していることからその可能性が高い。

参考・引用文献

平山修一、高木恭二ほか1977　『宇土城跡（西岡台）』本文編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集（宇土市教育委員会）

熊本中世史研究会編1980　『八代日記』（岩瀬社）

木下洋介1981　『宇土城跡（城山）』調査概報１、宇土市埋蔵文化財調査 報告書第４集（宇土市教育委員会）

高木恭二、木下洋介1985　『宇土城跡（城山）』、宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集（宇土市教育委員会）

木下洋介、元松茂樹1988　『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集（宇土市教育委員会）

藤本貴仁2000　『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第20集（宇土市教育委員会）

第Ⅲ章　調査の成果

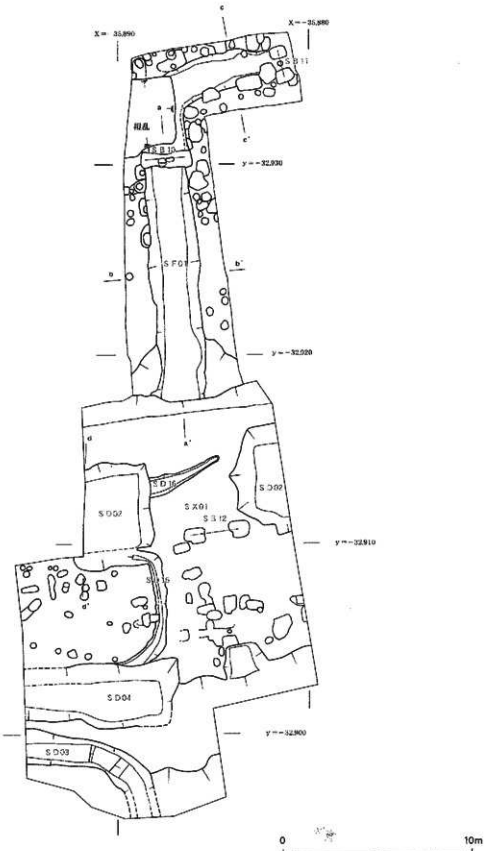
第１節　調査の概要

千畳敷の登城道は、曲輪東端部に位置する（第４図）。調査は計３回に分けて行ない、各調査とも比較的小規模な調査区を設定した。その概要は下表のとおり。

調査年	調査次	調査区の位置	主な検出遺構
平成３年度	５次	千畳敷東側の登城道周辺	SF01、SB11
５年度	７次	〃　下１段目と２段目の帯曲輪状平坦地	SD02～04・15・16、SB12、SX01
12年度	12次	〃　の登城道周辺	SD14、SB10

千畳敷東側周辺部の調査一覧

調査区空中写真（第７次）



第４図　調査区配置図（S＝１／200）

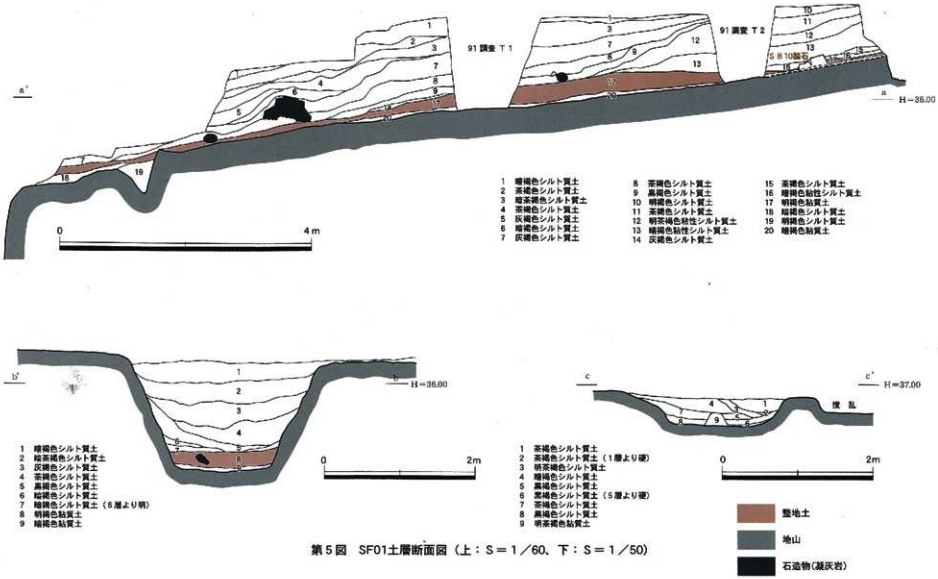
検出した主な遺構は、千畳敷の登城道（SF01）、内堀（SD02）と外堀（SD04）、門（SB10～12）、土橋（SX01）である。これらは地山の角礫凝灰岩や盛土整地土を掘り込んでいる。出土遺物は土師器皿、瓦質土器（火舎、擂鉢）、輸入陶磁器、石造物（五輪塔、宝篋印塔）の残欠などである。

第2節　遺　　構

登城道跡（SF01）

千畳敷東端部に位置しており、これまでのところ発掘調査で確認された唯一の出入口である。現在、千畳敷北側・南側にも道が存在するが、北側は戦後千畳敷が耕作地になっていた頃に作業道路として大幅に改変されており、城が機能していた当時使われていたか不明である。また、南側は戦前に西南戦争の記念碑が建立された際に敷設されたようである。

SF01全景（東より、第12次）



第５図　SF01土層断面図（上：S＝１／60、下：S＝１／50）

SF01の形態は、先述の記念碑基礎が深く掘り込まれているため一部に確認できない部分があるものの、平面形は「L」の字状で断面逆台形を呈する、いわゆる掘込み式枡形虎口の形態をなす。上幅約2.5m、底幅約1.3m、壁面の傾斜角度は約65°である。入口部と千畳敷との比高差約3mで、道を上りきったところでは千畳敷の遺構検出面と同レベルである（標高約36.8m）。

底部中央部がやや窪んでいることから、降雨時には雨水が集まり、道の傾斜によって排水する仕組みであったと考えられる。また、巨石を取り除こうとして掘り窪めた部分がある。その他は段差などの施設は確認されなかったが、12次調査で踏石を有する掘立柱門跡（SB10）を確認した。さらに、SF01埋土の観察より整地を行った痕跡が確認されたことから、少なくとも2時期にわたることが判明した（以後、整地前を1期、整地後をⅡ期とする。第5図参照）。なお、SB10は整地層を掘り込んでいることから、Ⅱ期に築造された可能性が高い。その根拠として、SB10入口付近の整地土上面が約3mにわたってほぼ同レベルであり、盛土整地の際に意図的に門の入口部分を平坦にしたと考えられ、整地と門の築造は一連の作業工程であったとみられる。

出土遺物で注目されるのが、五輪塔や宝篋印塔などの石造物の残欠である。これらは、整地層中にはほとんど混じらず、大半が整地層直上もしくは近い層から出土した。

門跡（SB10～12）

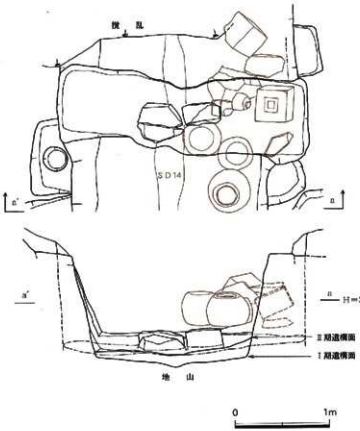
SB10はSF01が北側に屈曲する手前に位置する（第6図）。柱間確保のためにSF01の壁面を掘

SF01土層断面（横断）

SF01土層断面（縦断）

SF01石造物出土状況（西より）

石造物出土状況・SB10検出状況



第６図　SB10実測図（S＝１／40）

SB10検出状況

りこんでおり、人頭大の踏石を３石有している。本来は４石存在したと思われるが、うち１石は抜取られたようである。ボーリングステッキで確認したところ柱掘り方の形は南北に長い長方形と推定されるが、現在、遺構検出の状態で止めていることと、踏石掘り方が存在するために明確には確認していない。また、規模や構造から控柱があった可能性があるが、記念碑基礎の撹乱穴のために確認できない。先述のとおり、SF01Ⅱ期に構築されている。

SB11は、SF01北端付近に位置する。柱掘り方の形は南北に長い長方形を呈し、柱間は約５尺（約1.5m）で、登城道の出口に建てられた門跡とみられる。なお控柱は確認されていない。

SB12は、SX01東端付近に位置する。柱掘り方の形は南北に長い長方形で、柱間は約８尺（約2.4m）である。控柱は確認されておらず、検出位置から登城道入口に設けられた門跡とみられる。SB11・12は、控柱がないことから冠木門などの比較的簡素な造りの門と考えられる。

空堀跡（SD02、SD04）

千畳敷をめぐる内堀（SD02）と外堀（SD04）である。

SD02は断面逆台形の箱堀である（第７図）。これまでの調査の結果、SX01部分を除いて千畳敷を全周すると予想される。今回検出されたSD02は、上幅5.5m、底幅４m、深さ１m程度であり、堀壁の傾斜角度は約50°である。本調査区範囲内において、底部に段差や障壁は確認されていない。

SD04も断面逆台形の箱堀であり、これまでの調査の結果、外堀は千畳敷東側南半部から同南側に限られるようである。上幅２m、底幅１m、深さ0.5m程度であり、堀壁の傾斜角度は約50°である。

SD02・04とも底部近くに集中して五輪塔を主体とする石造物が多数出土しており、SF01出土の石造物と同時期に投棄されたと推定される。

溝跡（SD03、SD14～16）

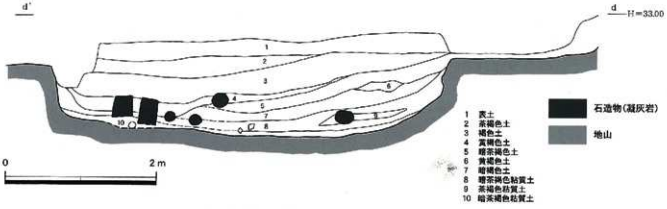
SD03は、千畳敷東側の平場に位置しており、SD04とは最も近い地点で約１mである。

SD02発掘状況

SD02石造物出土状況

SD04発掘状況

SX01周辺発掘状況

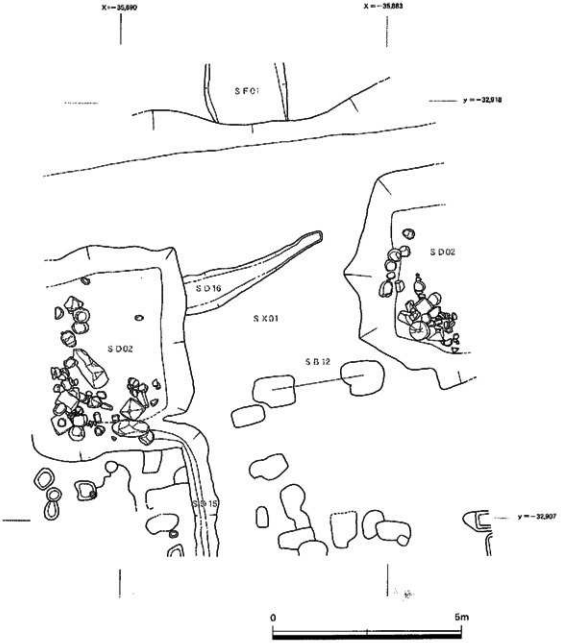


第７図　SD02土層断面図（S＝１／50）

千畳敷東南～東側ではほぼ南北方向にのびているが、SD04北端部付近からLの字状に東方向に屈曲する。断面逆台形を呈し、上幅1.3m、底幅0.5m、深さ0.5～1.5m程度であり、溝壁の傾斜角度は約70°と急峻である。底部には段差が２ヶ所確認されたが、SF01やSD02・04で確認された石造物の投げ込みは確認されていない。

SD14は、SF01中央部付近に位置する。当初は、SF01の排水溝として機能していたと考えられたが、埋土除去後、底部が硬化していたことからSF01廃絶後に雨水の流れによって形成されたとも考えられる。

SD15は、SD02とSD04につながる溝である。断面逆台形を呈し、上幅0.6m、底幅0.1m、深さ0.5mで、SD02側底部がSD04側底部にくらべて20cm程高く、緩やかに傾斜する。



第８図　SX01周辺実測図（S＝１／100）

SD02において雨水が溜まった場合、SD15を経てSD04に流れ込むことから、排水溝として機能したようである。

SD16は、SX01に掘り込まれた小規模な溝で、断面逆台形を呈しており、長さ4m、最大幅1m、同底幅0.5mで南側ほど深く、幅も広くなる。SF01より流れ出た雨水を堀に排水するための「水切り」と考えられる。

土橋跡（SX01）

SF01入口付近に位置しており、長さ5.5m、幅4.5m、堀底までの比高差1m程度である（第8図）。SX01とSF01には比高差約1.3mの段があるが、これは後世の削平によると思われ、本来はSF01に続くほぼ同じ角度の緩い傾斜面が存在したと考えられる。

第3節　遺　　物

土器・陶磁器

在地産の土師器皿・瓦質土器、備前焼をはじめとする国産の土器・陶磁器と、青磁や染付などの輸入陶磁器に分けられる。

土師器皿は全出土遺物の9割以上を占めている。また、瓦質土器は擂鉢や火舎などが出土しており、国産陶磁器として備前焼が出土している。

輸入陶磁器は、青磁や白磁、染付などが出土しているが、出土量はさほど多くなく、出土遺物総数の1割以下である。時期は15～16世紀後半代のものが多い。

石造物

五輪塔と宝篋印塔の残欠が出土した。多くは五輪塔残欠であり、9割以上を占める。SF01やSD02・04の底部付近から多く出土しており、ほぼ同時期に大量に投棄されたとみられる。投棄された五輪塔を各部位ごとにみると、風空輪の割合が多く大型で安定のよい地輪や水輪は少ないことから、地輪や水輪は何らかの目的で転用された可能性がある[17]。

鉄製品

楔、もしくは尾栓抜き（鉄砲の銃尾の栓を抜くための道具）と推定される鉄製品が出土した。残存部長約8㎝である。尾栓抜きであれば、これまでの調査で鉄砲玉や坩堝が出土していることもあわせ、城内における鉄砲の使用が想定される。

註

1）宇土城跡城山では石垣の石材として石造物の残欠が利用されている。例えば、昭和45年（1965）、三の丸跡が地下げされた際に、正平五年（1350）八月十九日銘の老蛟守高俊（宇土高俊）逆修の五輪塔地輪ほか計5基の地輪が出土している（富樫1977）。また、小西期（1589～1600）築造と推定される本丸の石垣にも多くの石造物が転用されている（木下1981）。

参考・引用文献

富樫卯三郎1977　「宇土城城山出土の五輪塔残欠」『宇土市の文化財』第３集（宇土市教育委員会）
木下洋介1981　『宇土城跡（城山）』調査概報１、宇土市埋蔵文化財調査報告書第４集（宇土市教育委員会）

土師器皿

瓦質土器（火舎）

備前焼（火舎）

青磁・白磁

染　付

鉄製品

第Ⅳ章　まとめ

今回報告した千畳敷登城道周辺の調査は、３ヵ年度で調査面積約400㎡という比較的小規模であったが、いくつかの重要な知見が得られた。

まず、登城道はＬの字形をしたいわゆる掘込み式枡形虎口であり、盛土整地により改修されていることや、登城道前面に位置する土橋によって往来できるように南北に堀が途切れていたことが判明した。また、SF01Ⅱ期に伴う踏石を有する門跡が確認された。道幅が狭く、柱掘り方が道路壁面を掘込む構造は、竪志田城跡（熊本県下益城郡中央町）で確認された薬医門と推定される門跡と類似する（大田2000）。

千畳敷内堀と外堀の登城道周辺の状況が確認されたことも重要である。先述のとおり、内堀は登城道に至る部分を土橋として掘り残しているが、現在までのところ内堀が途中で途切れることが判明したのはこの部分だけである。また、千畳敷南側で確認されていた外堀は、千畳敷東側まで延びており、曲輪の防衛に関して南側から東側が重要視されていたと考えられる。

さらに、登城道や外堀、内堀において五輪塔を中心とする石造物の投げ込みの状況が明らかになった。これまで内堀の５/６程度を調査したが、これほど限られた範囲からまとまって石造物が出土した地点はない。このことから、意図的に登城道やその周辺の堀のなかに投げ込んだとみて間違いなかろう。投げ込まれた場所が、登城道という城において重要な場所であることを考慮すると、おそらくこの投げ込みは城の廃絶を示すための意識的な行為とすることができよう。つまり、本行為の目的は、城の機能を停止させる行為に伴なう儀礼の一つと考えられる（柴田1992）。

城の廃城に伴なう破壊行為や儀礼的行為は、九州でも近世城郭の発掘調査で確認される事例が増えている。例えば、肥前名護屋城では石垣の隅角部分を集中的に崩したり、佐敷城では天下泰平国家安穏銘の鬼瓦が登城道に置かれた状態で出土している（深川1998）。宇土城の場合は、中世城における廃城に伴なう儀礼的行為の一資料として注目される。

参考・引用文献

柴田龍司　1992「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』第６号（中世城郭研究会）

深川裕二　1996『佐敷花岡城』Ⅱ（芦北町教育委員会）

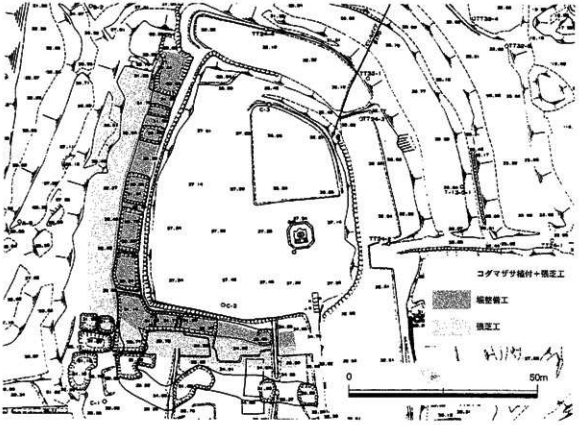
大田幸博　2000「中・近世城」『肥後考古学会創立70周年記念例会（第219回例会）資料』（肥後考古学会）

第Ⅴ章　保存整備

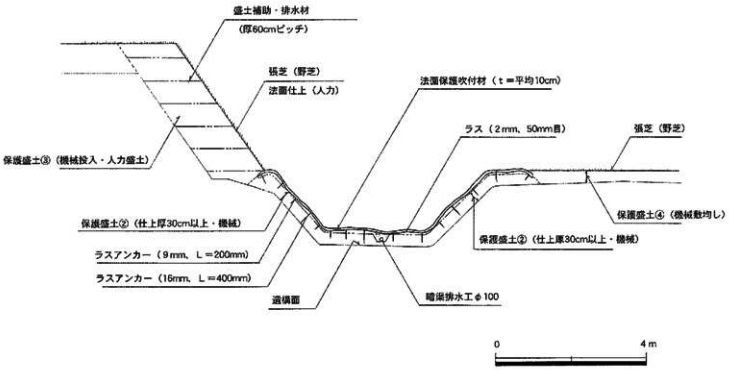
第１節　平成９年度保存修理工事

本年度は、昭和49年度（１次）と平成９年（９次）に発掘調査を行った千畳敷南側・西側の空堀（内堀）、切岸、平場の保存整備工事を実施した（第９～11図）。まず、空堀に関しては遺構保護のため盛土を行ない（30cm前後）、その上面にラスを付設した後、ソイルセメント吹き付けにより遺構を表現する方法を採用した。保護盛土の際には、地山との境界部分で雨水の浸入により局部的崩壊が懸念されたため、人力による盛土締固めや堀の法面保護工より下部に侵入した雨水を排出するために暗渠排水工を行った。切岸に関しては、保護盛土を施した後、切岸上部にコグマザサ植付工、同下部に張芝工（野芝全面張）を行ない、平場に関しても同様に保護盛土を施した後に張芝を行った。

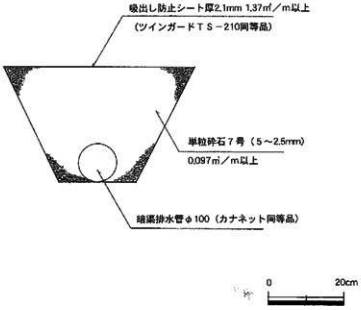
〈事業組織〉	事業主体	宇土市
	主幹課	宇土市教育委員会文化振興課
	設計・監理	㈲原風景
	工事施工	グリーン工業
	工事検査	宇土市役所工事検査室
	指導・助言	史跡宇土城跡保存整備検討委員会・文化庁文化財保護部記念物課・熊本県教育委員会文化課



第９図　堀保存整備計画平面図（S＝１／1,000）



第10図　堰標準断面図（S＝1／100）



第11図　暗渠排水工断面図（S＝1／10）

千曇敷全景（整備後、南西より）

千曇敷南西側内堀整備状況

千曇敷西側内堀整備状況

千曇敷南側内堀整備状況

千曇敷西側内堀・平場整備状況

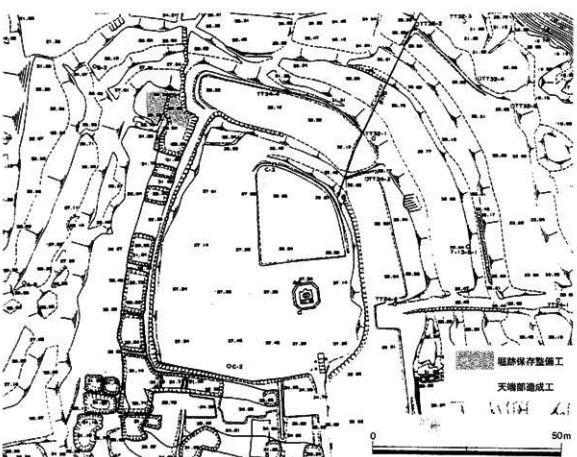
千曇敷西側整備状況

検討委員会整備指導

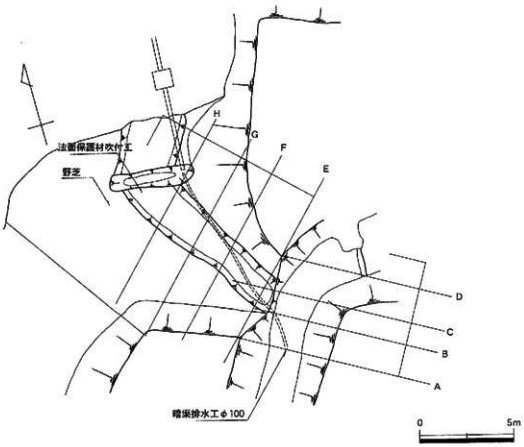
第２節　平成10年度保存修理工事

本年度は、平成10年度（10次）に発掘調査を行った千畳敷北西側の空堀と開渠、および千畳敷曲輪面の保護盛土工を行った（第12～15図）。空堀と開渠に関しては、前年度と同様に遺構保護のために盛土を行ない（30cm前後）、ラスを付設した後、ソイルセメント吹き付け（平均厚10cm）によって堀を表現する方法をとった。また、堀や開渠周辺の平坦面や斜面部には、張芝（野芝全面張）を行った。さらに、平成11年度以降、千畳敷において本格的に整備を着手することから、発掘調査で検出した遺構を保護するために盛土を行ない、その流出を防ぐため盛土外縁部に土のう積み（小口並べ）を行った。

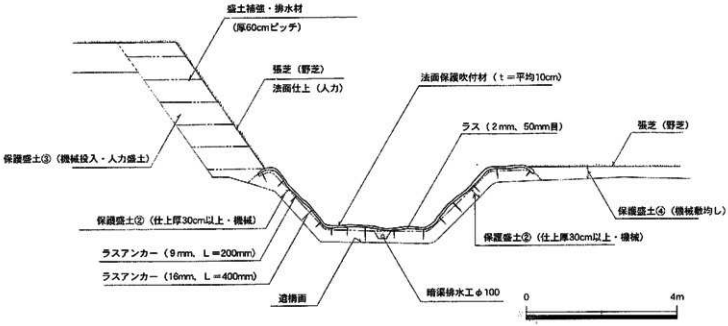
（事業組織）	事業主体	宇土市
	主幹課	宇土市教育委員会文化振興課
	設計・監理	㈱空間文化開発機構
	工事施工	㈱ナかスポ熊本支店
	工事検査	宇土市役所工事検査室
	指導・助言	史跡宇土城跡保存整備検討委員会・文化庁文化財保護部記念物課・熊本県教育委員会文化課



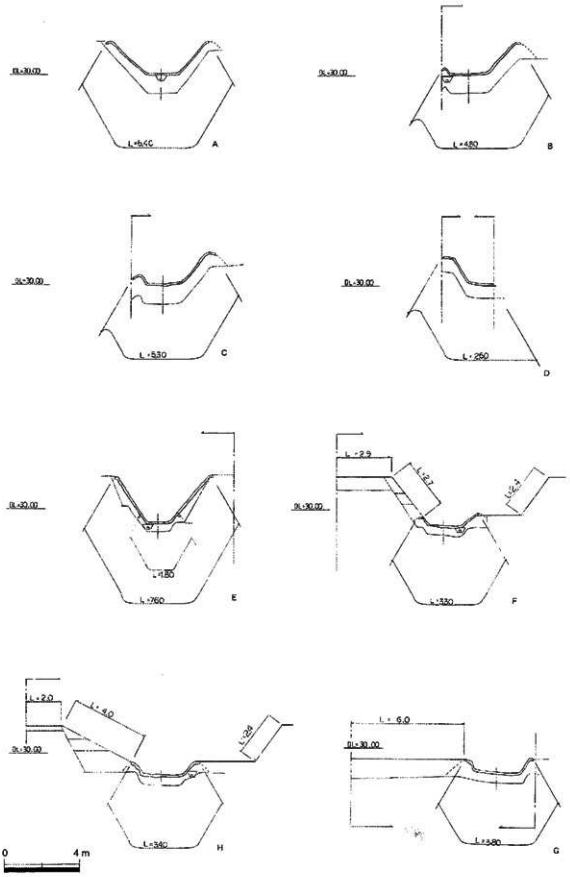
第12図　千畳敷保存整備平面図（S＝1／1,000）



第13図　堰保存整備平面図（S＝1／200）



第14図　堰標準断面図（S＝1／100）



第15図　法面保護工断面図（S＝1／200）

堀・開渠整備前状況（北西より）

堀・開渠保護盛土状況

張芝状況

ソイルセメント吹付け状況

堀・開渠整備状況

千曳敷表土すき取り状況

千曳敷保護盛土整形状況

千曳敷保護盛土状況

報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと(にしおかだい)
書名	宇土城跡（西岡台）Ⅳ
副書名	発掘調査と保存整備事業概報
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ号	第22集
編集者名	藤本貴仁
編集機関	宇土市教育委員会
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査次	調査面積	調査原因
宇土城跡（うとじょうあと）	宇土市神馬町字千畳敷（うとししんめまちあざせんじょうじき）	43211		32°40′34″	130°38′54″	5次 7次 12次	400㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇土城跡（うとじょうあと）	中世城	中世	登城道跡・空堀跡・溝跡・門跡	土師器皿・瓦質土器・青磁・染付・白磁などの土器・陶磁器、石造物、鉄製品	2重の空堀跡、盛土整地された登城道跡、踏石を有する門跡、廃城に伴なう石造物の投棄

宇土城跡（西岡台）Ⅳ
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第22集

発行年月日 2001年3月31日
編集・発行 熊本県宇土市教育委員会
〒869-0433
熊本県宇土市新小路町95
印　　刷 コロニー印刷